

7 経営問題

東北農業試験場農業経営部長 阿部 廣雄

試験研究サイドから経営問題の話題提供がされていないので、全体的抱括的な感想を5点ばかりとりあげてのべてみたい。それは、①主題に対する基本認識問題、②発展路線方向の問題、③発展タイプ類型の問題、④複合化の問題、⑤生産組織問題である。

第1番目の基本認識ではいくつかの共通的な視点あるいは認識があったと思う。その中の一つは東北地域は産業基盤が脆弱であるという意味で産業の後進地域であり、そのために労働力が流出し生産力の展開が困難で、それと裏腹の関係で自己完結性を貫徹することができないだけでなく、組織的生産活動の困難性が増々増大しているという認識である。しかし、その反面では農業利用によって潜在的な土地資源が40万ha近く存在しているというように未利用資源が豊富である。これらの土地資源は生産力展開の視角から開発の必要性が大いにあり、また、生産的な効果もあるという面から、未利用土地資源の位置づけの問題や、開発可能性の問題がそれぞれの話題に共通して論ぜられていたと考える。しかし、実際問題としては困難の伴う問題であるだけに、各種の振興手段の総合化とシステム化が行われ、同時に、地域特性に応じた開発整備を計画的・総合的、あるいは段階的に行う必要があるということで、共通認識として集約できると思われる。これについてのコメントとして第1点は、低未利用地の開発問題を考えるに当っては、第一次的には農民が生活していくための自立型農業をいかにして作りあげていくかということに力点がおかれなければならない、換言すれば農業で十分食えるような条件設定を研究問題として解明していくことが出発点になるものとする。その場合には計画的なアプローチだけでなく構造視点からも今後見直してみる必要があると思われる。コメントの第2点は開発に当っては労働力と開発主体の問題が極めて重要であり、また生産力段階に対応した投資の序列性の問題も非常に重要であると思われるが、今回はこれらの話題が欠けていたと思われる。

第2番目の問題として、農業生産を近代化して、コストを節減し、かつ生産性を上げていくことを確実に実現していくために考えなければならないことの一つは、発展方向をどう考えるかという問題である。理論的にも、現実的にも、規模拡大ということが非常に重要であると考えられる。そのためには基盤を整備して、未利用地と耕地が家畜あるいは作物を媒介として、資本集約的に結合していくことが必要になってくるが、それと同時に結合が経済主義や経済合理性一点張りとかだけでは解決しえないことは今までの経験によっても証明されている。従って、技術合理性の上にたった経済合理性の追求という問題が非常に重要であると思われる。従来はどちらかといえば、労働生産性の向上のみが強調されたきらいがあり、また、我々もそれにのっかって研究活動を展開してきたという経緯があったが、これからは最低限度、土地生産性を高めながら同時に労働生産性も高めていくこと、またその意味で基礎資源の総合効果をねらうという視点から、この問題を考えていく必要があると思われる。また、そういう内容の報告もあったと思う。しかし、土地は極めて有限性が強いものであることから、その改善の問題が同時平行的に入ってくる必要があると思われるが、こ

の問題は地域性のバラエティにとんだ問題であるから、それぞれの地域的な特性に応じた開発整備を長期的な視点から計画的・総合的に行う必要がある。そして、所得の向上だけでなく生活環境を同時に整備して、農村に魅力のある地域社会を建設していくために、適正に人口を配置し、労働力を確保していくという考え方が必要だということは、高坂氏が指摘された通りである。次にこれはコメントになると思われるが、開発地は何といっても低地価地域であり、従って土地の拡大方向、すなわち土地利用型の発展方向を基本的に考えてよい地域と考えるが、同時に土地を除くその他の資本装備、固定資本の流出という問題も併せて考えざるを得ない地域でもあり、その点の認識も必要である。それとともに開発地では、省力管理技術を基本にして、粗収益増大の技術よりも、費用節約の技術を採用せざるを得ないのではないかと考える。さらにそれぞれの地域性を踏まえた、少数精鋭主義の畜産経営あるいは主業的な経営があり、地域の特性に応じた団地形成が行われながら、団地相互間の脈絡性もあるというようなダイナミックな発展路線が開発地域にこそ必要ではないかと考えている。しかしそれと同時に開発地はある意味で悪条件地域とも言えるわけであるから、それなりの社会的な費用という概念を地域開発に当っては 相当突込んで、考えていく必要があると思われる。

第3番目の発展タイプ、あるいは経営類型の問題は視点のおきどころによってどのようにも分類できると思われる。資本利用視点からは土地利用型発展タイプが基本となるであろうし、規模利用視点からは複合経営なり主業経営なりが展開しており、集約度段階から考えるならば集約的経営と粗放的経営があるというようになると思われ、またそうなるべきであると考ええる。これは地域によってそれぞれに適応した発展タイプが現在存在し、将来も存在すべきであるということから、そう考えざるを得ないわけである。しかし、そうかといって発展タイプが無制限に考えられていいということではなく、おのずとそこには限界があると考えざるを得ない。従って、原則的には土地利用型の省力管理型発展タイプを基本的タイプとして、固定観念にとらわれずそれぞれの事情に応じて弾力的に対応していく必要があると考える。問題は資源の保存状態・あるいは配置、技術ならびに技術水準、それから生産力段階、資本力、住民意識といったもろもろの地域性を踏まえた研究、あるいは行政施策の展開が、開発地域でこそ大切ではないかということである。

第4番目の複合化問題の重要性については、各話題の内容に共通してあった指摘と思う。しかし、この問題については、本来的に複合化しなければいけない技術的・経済的な要因は、学問的には明確にされていると言える。それは、経営部門間あるいは作目間の補完関係からその要因が明確に説明できるということ、もう一つは労働力、生産手段などの利用協同という点で表現できる、いわゆる補合関係が、理論的に明らかにされているということである。しかもこれが今日的な問題としても極めて重要とされている。例えば50年度の農業白書の中にも、複合化問題を重点施策の一つにとりあげるということを明確にうたっているわけで、いわゆる古くして新しい問題である。今日提起されているような複合化問題の背景には、経営単純化に伴って非常に多くの技術的、経営的な矛盾が露呈されてきたという問題、それと同時にマクロ的な面から土地利用度、それと裏腹の関係で必要な国民食糧、特に雑穀類の壊滅的な打撃の問題があると思われる。これらの反省から土地利用

の高度化、即複合化問題という考え方ができていると思われるが、この点についてはいささか、戦前的な複合理論が強いのであって必ずしも今日的な複合理論とはいききれないという気がしてならないわけである。今日と言えども、依然として農業生産なり経営を単純化せざるを得ない理論的な理由が基本的にはあると思われるが、そういう問題を踏まえながらもなおかつ複合化問題を重視せざるを得ないと考えている。なぜなら、家族労働力を完全に燃焼させることにより農業だけで食べる体制をつくるという問題を、土地利用問題、あるいは部門構成問題としていかに考えていくかということがあるからである。その場合に一農家で複合問題を考えることが必ずしもメリットが高いということにはならないと思われる。依然として専門化の必要性があるし、経済合理性を無視することはできない。今後高度に技術化された作業体系が増々要求されるとするならば、農家という考え方ではなく作業分担あるいは機能の分担というものを、一定の空間的広がりの中でそれぞれの持ちまえを充分発揮しながら、あるいは発揮できる体制の中で、この問題を考えていく必要がある。いうなれば、地域ぐるみあるいは地域相互間の協力体制の中で、近代的な複合農業を定着させるための、論理構成をはじめとする諸々の技術研究あるいは経営研究が必要になってくると考えられる。複合化の論理をどこにおくかについては必ずしも技術研究者と経営研究者では一致しない点もあると思われるが、今後十分深化させる必要のある問題ではないだろうか。あくまで、生産力の問題、農法の問題として複合化問題を考えてみる必要があると考える。

最後の生産組織問題については全般的に簡単にかたづけられていたように感じられる。ある意味では開発地ほど、この生産組織化問題あるいは集団化問題を重視せざるを得ない地域はないと考えられる。というのはコストを下げながら、比較有利性の高い農業を展開するということになると、どうしても能率原則を貫く必要があると考えられるからである。そのためには第1には大型高能率機械の導入と、導入した機械施設の適正操業度の問題、第2には分業に基づく協業的な労働組織づくりと、管理組織の採用の問題、第3には流通問題として、流通経費を節減して商品価値を高めながら市場に対応していくための、大量化・市場選択計画化、言葉をかえるならば大量を安く・早くという組織体制確立の問題などが重要な問題になってくると思われる。それがためには一定の規模単位の確立が非常に重要な問題になってくるものであり、あるべき戦略論として同時に具体的な戦術課題でもあるという位置づけのできる問題であると思われる。また利用者側と供給者側が一定の規模単位をもたなければならないというコメントがあったが、それとともに利用者間にアンバランスを生じないことが大切と思われる。その、アンバランス要因としては2つの面があると考えられる。牧場問題に例をとると、一つは農家の頭数増加が牧場規模に対応しないという場合、今1つはそれとは逆に集団の規模、牧場の規模が農家の生産力段階とか頭数規模に対応できない場合である。従って、研究問題として取り上げる場合それぞれの面ごとに課題接近の方法が違ってこなければならぬと考えたいわけである。今後は技術研究においてそういう視角を踏まえた開発研究をして頂ければ大変有難いという感じを受けている。それと同時に何といっても個別経営確立のための集団化ということが基本姿勢になければならないから、やはり、個別と集団とが一体となった生産活動なり、経営活動を展開していくことが必要で、そこには、人の問題、管理技術の問題、牧場技術を発

展，向上させていくという問題，その他個別経営における労働競合の排除の問題，資金・予算の問題，流通問題などがあると思われる。それと同時に畜産に例をとるならば，育成部門は個別経済としてはひきあわないということから公共牧場で行われている場合が非常に多いわけであるから，個別経営合理化問題を抜きにして，公共牧場だけを切り離して，赤字が大きいからこの牧場は問題があるというような，短兵急な素朴な発想をすることには問題があると考えられる。問題は個別経営の発展に対していかに公共牧場が経営経済的な合理性を発揮しているかどうかであり，それさえやっていけば，公共牧場を切り離して分析した場合に赤字であっても，個別経営に対する補佐という点が大きいわけで，そのことを斟酌しなければならないと考える。“個”と“全体”の有機的な統合体という意識から，集団組織問題を考え，なканずく開発地においてはそういう考え方が重視される必要があるのではないかと考えられる。

座 長

時間が超過しており，特に後半は脱兎の感があった。内容的に少し盛りだくさんすぎたのではないと思われる。私なりに各事項について御指摘のあったことをまとめたが，くり返し申し上げることは省略させて頂き，結びにかえて，二つばかり申しあげたい。

一つは，始めが大切だということである。計画段階あるいは開発の実施段階，あるいは開発がすすんで営農が始まった，立谷場長が言われる地力依存段階，この時にすでに勝負がついているような気がする。こういうところに対して，行政普及，試験研究の私どもが大いに知恵を出し合う必要があるし，協力し合う必要があるということである。すでに得られている成果が今日発表されたようになりかなりあるわけであるから，行政の方をお願いしたいことは，計画の段階でぜひそれらの成果を盛り込み，成果が実際に利用されるような計画にしてもらいたいと思う。実施されて，欠陥がでたあとの後追い技術の試験研究を試験場にたのまれることは試験研究機関としては大変こまることである。と同時に私ども研究機関では先取りの研究をやっておいて，あらかじめ技術を提供する義務もあると考える。

二つ目には，開発地を含めた農業の方向についてで，福島県農業振興基本方針の中から引用させて頂きたいと思う。「地域農業を全体として複合化し，作目及び経営相互間の有機的連系を促進する生産体制を確立する」ことだと思う。しかし，今の話にもあったように，それをいかにしてそれぞれの地域にあったものに組み立て，構築するかということこそ必要であって，そのためにも行政，普及，研究のお互いが大いに協力する必要があると考える。以上二つを所感にかえて結びにしたいと思う。今日御発表のあったいろいろの研究成果を，それぞれ地域農業の発展に活用されて東北農業が発展することを期待したい。終りに座長補佐としていたらぬ私をいろいろお助けいただいた支場長，各部長の各位に御礼申し上げます。また，熱心にお聞きいただいた皆さんにもあわせて感謝を申し上げます。